
英雄の条件（仮）

城島 和也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

英雄の条件（仮）

【Nコード】

N9129X

【作者名】

城島 和也

【あらすじ】

神という存在に飽きたとある神が転生を決行 失敗。
一人の人間を巻き込んで、当初転生する場所だった日本がある世界とは異なる世界、つまりは異世界に転生してしまった。さて、どうなりますやら・・・

注：説明多し。主人公チート↑よくある感じですよねー。ハーレム・・・・なるか？説明激多し（大切なことなので2回・・・
そんなん関係ねーぜっていうかた向けです。

何を思ったか、文才もない作者（作者というのも憚られるw）が
まぐれと自己満足のために書いているものです（汗
面白いと思ってもらえればとても嬉しいです。
感想もらえたら、内容問わずはしゃぎますw
そんなかんじでどーぞー

プロローグ

――神界――

ガリガリガリガリ―カツカツカツ―ドスン!!

「フー。こんなもんでいいかな」

始まりの神ゼウスが己の体を材料にすべての力を以て創造した文字通りの神のための世界。神界。

その世界の片隅で一人（柱？）の神が地面に奇妙な図形を描いている。

『ゼウスに最も近い神』『前神未到』『女神殺し』『俺のヘラちゃんを返せ』『一人のときはきをつける

』などなど様々な名―後半は違う気もするが・・・をもち神・アリオン。

彼はその奇妙な図形。俗にいう魔法陣の中心に立っている。

「年齢はー、15歳くらいだったら動きやすいかな？今の俺の記憶はひきつけないけど最低限の知識は植えつけられるはず・・・」

ガリガリツツと新たに書き加え中心に戻るアリオン。

彼は『神』という存在に飽きていた。そんな彼がゼウスの聖遺骸を見つけたことによって本来不可能なはずの神↓人間への転生をしようとして決意したのは当然のことだった。

他の神が「俺、神に飽きたー」とかアリオンが言ってるのを聞けば、おそらく集団でアリオンを襲っていただろう。「お前、10人も女神困っというふざきなやつ」とか「このくそリア充がっ」などの罵倒とともに……

「よし、俺専用転生魔法陣完成。」

片膝をつき、祈るような姿勢をとるアリオン。

「……我らが父ゼウスよ」「たったった」「汝の息子が一人、アリオンが希^{こいねが}う。」「タタタタ」魔法陣が淡く発光し始める。

「汝の力を以て我の願いを聞き入れんことを……」「ダダダダ……」

魔法陣の輝きが増す。

「転s「アリオンっ（様・この野郎・お兄ちゃん・さん）」
「うおっ!？」」

10人の女神（アリオンの女）たちが声を荒げ、魔法陣の輝きが数瞬、鈍くなったが、輝きが発光が収まったときアリオンの姿は神界から消えた。

その場には10人の女神だけが呆然と取り残された。

プロローグ（後書き）

さて、始まってしまいましたよー

正直、先の展開は作者にもわかっておりません（汗
グダグダにはならないように頑張っていきたいですね。

面白いと思ってもらえば幸いです。
どぞ、長いおつきあいを（ゲザー

たどり着いた街と出会い（前書き）

この話の最後まで主人公出てきませんw

そんな感じでどーぞー

たどり着いた街と出会い

——ヒンメル街——

私の名は、イリアス・フォン・ロンドベルト・ツヴァインベルグ・
・だった。

今は、イリアと名乗っている。といってもこの2週間、あんまり人と出会わず、名乗る機会がなかったので名乗るつもりといったほうが正しいが。

私と私の従者であるアイリスは、今、しばらく滞在することに決めた。花の街・ヒンメルへの街道を歩いている。目的地は奴隷商。

私は戦闘には多少自信があるのだが、いかんせん世間のことをあまり知らないのだ。

アイリスは多少、常識を知ってはいるが、それでもといったレベルであるらしい。

そんな私たちは生きるために「守護者」として、稼いでいくつもりなので、家のことを任せられるものを探そうとなり、公の応募は少し危険だろうとアイリスの判断で奴隷を買ったほうが安全だろうとなったのだ。

——奴隷館・ロッキー——

「ここまで来たのはいいが、やはり気が進まないな・・・」

「お嬢様。前向きに考えてください。お嬢様に買われた方は他のとこにいくより必ず幸福ですよ。」

「そーゆうもんなのかな」

イリアスの言葉を無理やりのみこみ、両開きの扉を開ける。

「いらつしゃいませ。おや？初めてのお客様ですね。初めまして。
わたくし私、当奴隷商の支配人、ボンド・ロッキーと申します。本日はどのようなご入り用で？」

館の中はキレイに掃除されており、正面奥に4つの扉、その真ん中に受付のようなものがある。その受付にいる男―30代ほどの中肉中背、面長の髭のない小奇麗―が、入ってきた私たちを見るなりよく通る声で挨拶してきた。

「私はイリア、こっちはアイリス。今日は身の回りを世話できる者を探している。」

「イリア様にアイリス様ですね。はい、了解しました。それではまず、なにか身分を証明できるモノはお持ちでしょうか？」

言われ、二人とも『ガーディアンズカード』を渡す。

「はい、結構でございます、奴隷を直接ご覧になりますか？それとも、私が数人連れてきましょうか？」

「そうだな、直接見せてくれるか？」

「畏まりました。少々お待ちください。」

受付のボンドさんの手元が淡く光る。おそらく簡易通信術式を使っているのだろつ。二言、三言言葉を交わしてから私たちの方に向き直る。

「お待たせしました。どうぞこちらへ。」

私たちから見て右から2番目の扉に向かうロッキーさんについていく。

扉の先はジグザグに続く廊下だった。

明かりは充分にあり、なかなか清潔にしてある。

廊下の両端には、鉄格子がはめてある、所謂、牢屋・・・なんだけど、牢屋って言葉が似合わない。

中には2、4、5人ほどの人が入っており、寝ている者、腕立て・スクワット・柔軟などなど体を動かす者、こちらに手を振る者など実に様々な人たちがいる。ただ・・・

「なんというか。給仕には向いてなさそうな感じの人たちだな・・・」

後ろを歩いているアイリスに囁く。

アイリスが反応するより早く、ロッキーさんが声を発する。

「それはですね。お二人は『ガーディアン守護者』の方ですから、この先戦闘で
きる者が必要になるかも知れませんが・・・その時には是非、我が
商館へと・・・と、思っておりますですよ。」

なるほど商人らしい考えがあったのだな。

「ちなみに、左から2番目のほうに給仕ができる、というか戦闘ができない者がおります。」

7回角を曲がったところで2階に上がるのだろう階段があった。

2階につくとそこは大広間といったところだった。

その広間の中央に12、13・・・15人の男女が性別関係なく整列している。種族は人間族のみだ。

「それでは、紹介いたしましょう。全員「元」がつかます。向かって右から、執事、執事、執事見習い、庭師、料理人、・・・」

ロッキーさんが奴隷たちを紹介してくれるのだが、私―おそらくアイリスもだろう―は別のことに気をとられていた。

（奴隷たちの中では・・・ない？壁際にいる2人も違う。・・・どこから？）

どこかは分らない。けど、かなり近い場所から漠然とした「何か」を感じる。

この大広間にある扉は私たちがやってきたのを抜くと、残りは6個おそらく一つはロッキーさんが言っていた、戦闘以外の者がやってきたのだろう扉だろう。

ということとは、残るは5個。

そのうち4つは左右に対称にある。

なんとなくだが、正面に見える残りの一つからかんじるのではないだろうか。

（・・・いや、まずは今日の目的のほうが先だな。）

「……メイド見習い。となっております。ご希望に添える者はおりますでしょうか？」

「うん、アイリスどーしたらいいかな？」

事前にアイリスと決めていたのは「女性」であることだけ。なので、実際に見たアイリスの意見がほしい。

「そうですね、人数は2人。変に染まってないということで、メイド見習いの子と農婦の子でよろしいかと。」

・・・うん。2人とも、初々しい感じた。真面目そうなのもいいな。

「よし、メイド見習いの子と農婦の子がいいかな」

「こちらの2人でございますね。」

「うん。」

「畏まりました。お値段のほうですが、2人合わせて金貨1枚となります」

言われ、アイリスが金を払う。

「はい。ありがとうございます。こちらがシルヴィー、こちらがセララといいます。2人とも挨拶なさい。」

「ハイ！！よろしく願います。ご主人様！！シルヴィーといいますー！」

「せ、セララですっ！よよ、よろしくお願いしますですっ！-」

元気いっぱいメイド見習い・シルヴィーと若干緊張しているらしいセララが挨拶してくる。

「うん。こっちこそよろしくな。シルヴィー、セララ。私はイリア、
こっちはアイリスだ」

言つと再度、よろしくお願いしますと頭を下げてくる。

「それでは、シルヴィーとセララには召し物を与えてきますので少々お待ちいただきます。ルゼさん、二人を頼みます。ガーク君残った者を、戻しておいてください。」

そういわれて、今まで壁際でじっとしていた二人が動き出す。

「それでは入口までお願いします。」

といって左側の扉に向かおうとする。

「あの、すみません。あの部屋はなんなんですか？」

気になっていたことを尋ねるとロッキーさんは足を止め、振り返る。その顔は、笑っている。

純粹に嬉しいといった感じの笑みだ。

「ほう、お気づきになりましたか。気になるのですしたらこちらにどうぞ。」

広間の奥の扉に向かう。

扉を開けロッキーさんが先に入る。

私たちも後に続く・・・そこには、人が浮いていた。

たどり着いた街と出会い（後書き）

さっそく、主人公に攻略されそうなのが4人。

アイリスさんは微妙でしょうか・・・

というか、イリアの感じが一定しないんですよねー

まあ、おいおい落ち着くのを期待しますか（ナゲヤリー

面白いと思ってもらえれば幸いです（ゲザー

眠る少年と目覚め（前書き）

・・・とりあえず二日に一回のペースで更新したいなーっていう当初の目標が

すでに、過去のものに。。。 （- -;）

しかも少し短め？

更に主人公しゃべらないw
イリアの口調安定しないw

そんな感じでどーぞー

眠る少年と目覚め

—— 奴隷館・ロッキー ——

15、6歳くらいだろうその少年は、その・・・男性を表現するのに相応しいのかは分からないのだけど、キレイだった。

人づての話だけでしか聞いたことのない、漆黒の髪は見ただけで分かるぐらいサラサラだろう。

それに相反する透き通るような白い肌。

整った容貌は貴族や王族の中でも見たことはない。

「今から2年前でしょうか・・・私の知り合いわたくしの奴隷商人から、譲り受けました。

その者の話によると、今から12年ほど前に森の中で見つけたそうです。

その当時から眠っており、私が見るまでも、見た後も、一度も目を覚ましたことはありません。

更に、私のところではまだだったのですが、イリア様のように何かしらを感じた（・・・）お客様もあり、その方たちの協力もあったのですが

やはり無理だった。と言っておりまして。」

ロッキーさんが説明してくれるが、その声は、その内容は理解できるのだが、私の心は別のことで占められている。

（なんだ、この胸の高鳴りは・・・）

そう、今までも、初めて大勢の人の前にでた時、戦闘の緊張感、そしてあの時にも様々な動悸が激しくなることはあった。

だが、今感じているのはそれとはまったく違う種類なものだ。

「ちなみに、その何かを感じたお客様は4人いたそうですが全員、女性のかただそうです。」

何故。何故このタイミングでそんなことを・・・？

今までいたその人たちも今の私のような、胸の高鳴りを？
なんなんだ、この感情は・・・

「そ、その名前はあるのか？」

ようやく絞り出せたその声は、震えているのが自分で分かるものだった。

「いえ・・・少し見ていてくださいね。」

部屋の中央で眠る少年に近づいていくロッキーさん。

そのまま浮かんでいる少年に触れ、次に部屋の片隅に向かう。

「・・・・・・・・・・？」

疑問に思うがとりあえず見守る。

と、

「っ！？ろっ『ガンッ！』・・・・・・・・ふえ？」

いきなり、カスターネだろうか？何かの怪物のような顔を柄にあしらった反りのある剣を手に、浮かぶ少年に振り下ろす。

さすがに声を上げたのだけれど・・・剣は少年の少し前で何か（・・・

」に弾かれる。

「とまあ、このようにただ触れるだけならば出来るのですが、危険や害意のある攻撃、もしくは、魔法全般は通さないようなのです。

なので、こちらからの『アヘンダ・オープン（手帳開示）』ができませんので、名前はおろか、出身もわかりません。」

・・・意識がないにもかかわらず己の身を自動で守る？
見たことはおろか聞いたこともない。

「そ、それは『魔力障壁』ではないのか？」

「はい。知り合いのもとで数人、私のもとでも3人ほど『職業：魔法使い』に属する方たちに見てもらったのですが、『魔力障壁』ではない何か（・・・）との共通の見解でしたね。」

「一応、私も見ていいかな？」

「もちろんですとも。私としても、彼に何かを感じた方を見るのは初めてですからね。」

魔法に関して専門である『職業：魔法使い』に属する人たちが見ているのだ。

正直、私ごときに何かがわかるはずもない。

ないのだけれど、何故か何かをしなければ、いや、何かをしたいという気持ちになる。

そして、少年に近づきその体に触れる。

瞬間、少年（とそれに触れている私）を囲むように幾重にも魔方陣が展開される。

「お嬢様っ！！」

アイリスが珍しく叫ぶが、不思議と私には危機感が感じられない。

むしろ安心感がある。

十数秒して魔方陣がきえる。

いつのまにか少年は床に横たわっている。

浮かんではない。

しばらくの静寂が続く。

そして、少年が目覚めた。

私はその瞳を見て、ああ、これが一目ぼれかと初めての感情に結論を出せた。

眠る少年と目覚め（後書き）

ふむ、やっと目覚めましたねー

今んとこあんまり説明的なものは．．．．．い？

いや、ずっと説明回。。。なのか？

んん？まあ、いいや（いいんだっ！？

作者——自分で作者って打って背筋に寒気がw——は一目ぼれというのを信じてません。

ん？どうでもいいですねw

感想とかありましたらよろしくどーぞー（ゲザー

神と巻き込まれた少年（前書き）

少し頑張って連投してみました。

やっと主人公です。

四話目にして初喋りw

そんな感じでどーぞー

神と巻き込まれた少年

——●●——
上も下も横の方向もわからない。

明るいのかも暗いのかも判別できない不思議な空間。

そして、その空間自体が俺だということ。

理解できなくても大丈夫だ。俺だって理解してるとはいえない。

漠然と説明されただけだしな。

こんなとこにいたら流石に俺も数時間でパニックになるんだろうが、
「説明された」でわかるようにここには俺だけではない。

「そろそろ、馴染んできたころだね。なにか感じないかい？天君^{ソラ}。」

この声の主、自称神の男（たぶん男）アリオン。

俺と同じで姿は見えない。

この異常な、現実かもわからない現状で俺が正気を保ってられたのは、こいつという説明係（話し相手）がいたからだろう。

「ん・・・いや何も感じ・・・ああ、何かに引っぱられる感じがするかな？」

「うんうん、僕と君の複合体があっちの世界で適合しはじめたようだね。」

うん、正直に言うがこいつの説明は足りないと思う。

その足りない説明を頑張ってまとめると・・・

・俺はアリオンの転生とやらに巻き込まれた

・本来、俺がいた世界に転生するはずだったのが、転生に失敗したせいで“違う世界”つまり異世界への転生になっただけらしい

・俺とアリオンは今、『生命の根源』とよばれるいわば精神の奥深くにいるらしい

・俺とアリオンは融合しているが人格は俺に任せるとのこと

・今、むこう、肉体のほうは完璧に放置している状態らしいが神の能力うんたらで守ってるので安心

・こちら（精神）とあちら（肉体）では時間の濃さが激しくちがうこと

などなどだ、最後のに関してはこちらでの1時間があちらでの1年に相当するらしい・・・大丈夫か俺の肉体と思っただが、その点は安心していいという話だった。

「ということ、もう目覚めるのか？」

「そうだね。もう幾何の時間もないね。というわけで最後の質問を受け付けるけど、何かあるかい？」

「最後・・・か、そうだな名前。

名前はどうすればいい？」

「おっと、名前かそれは考えなかったね。

うん、君の好きにすればいいよ。

僕のアリオンでも君の檻神オリガミ 天ソラでも

もじってもいい。君は自由だ。」

「そうか。うん。名前は適当に決めるさ。世話になったな。」

「ハハッ こつちこそ巻き込んだってすまなかったね。
あそこであの子達が乱入してこなかったらねー」

なんというか、引つ張られる？感じが強くなってくる。

「まあ、いいさ。元の世界に何か未練があるわけじゃないしな。こ
ちらで適当に暮らしていくさ。」

「うん、神生楽しくがなによりだ。君の好きなようにするといい。
・ 周りがほつといてくれるかは分からないけどね。」

「うん？なにかいったか？」

「ハハッ 何もないよ。それじゃ第2の生を楽しくね。」

「ああ、わかった」

そこまで言い切ったところで俺の意識？は途切れた。

—— 奴隷館・ロッキー ——

目を開け、飛び込んでくる情報からして俺は室内にいるらしい。

意外だ。てつきり森の中とか雪山の頂上とか、そんな展開になるだ
ろうと踏んでいたのに。

俺にしてはかなり平和な目覚めだろう。

体は問題なく動くようなので、状態を起こすと近くにいた女、 18
歳前後といったところか。と目があった。

赤い。紅い。朱い。

どういったらいいのかとにかく紅い、肩口まで届く髪の毛の女。

間違いなく美人の部類、いやトップクラスと言っても過言ではないだろう容貌をもつその女と数秒見つめあう。

前言撤回。

やはり安穩な生活は俺には遅れないのだろう。

その女は恋する少女のように顔を赤くしていた。

恐らく「ような」ではないんだろう。

神と巻き込まれた少年（後書き）

正直に言いますと、登場人物の詳細な設定とか性格とか決めてないです（・ー・；）

そんな、愛すべき者たちですがどうぞよろしくお願いします>m（
——）m<

アリオンの再登場は今のところ考えていませんけどねーw

評価とか感想とかもらえたりしたら嬉しかったりなんかだったり（ボソッ

よろしくです（ゲザー

記憶喪失とこれからの選択（前書き）

プロローグ含めての5話目です。

主人公、リオンの能力の一端が垣間見えます。

能力だけで説明も戦闘シーンもありますがそんな感じでどーぞー

記憶喪失とこれからの選択

—— 奴隷館・ロッキー ——

目を覚ますと見知らぬ部屋、知らない人、しかも明らかに日本人ではない。

さて、困った。

いきなり人と出会うとは思ってなかったな・・・

俺がああの空間で過ごした時間は、正確には分からないが半日近く程度だろう。ということはこちらでは12年ほどの時間が経過しているということになる。

そもそも言葉は通じるのだろうか？

今俺がいる部屋で目視できるのは三人。

まず、くすんではいるが唯一の黒髪をもつ男。

雰囲気からすると商売人といったところか・・・いやどこがどうといった訳ではないんだけど。

扉近くに佇むは給仕服、所謂メイド服というものを着ている、20代前半といったところの暗い青の髪をした女。

こちらは、見た目通りだが、こちらを油断なく見ている。結構な手練れではないだろうか。

そして俺から一番近くにいるのが、燃えるような紅い髪をもった女。

メイドの女も十分美人なのだが、この女の傍にいと多少眩むのではないかというほどの美貌の持ち主。

その女はただ純粹に俺への興味―好意と言ってもいい―が占めているようだ。

そもそもの話、言葉は通じるのだろうか？

一応3人とも敵意らしきものは感じられない。

メイドの女からは警戒心を感じるが恐らく紅髪か男かのどちらかが主人なのだろうから自然な反応だろう。

俺が目覚まして十数秒が経ったと思うが誰も喋らない。

言葉が通じないにしてもまずは声を発するべきかと考えたので、とりあえず沈黙を打ち消す。

「すまないが、ここはどこだ？」

相手の名前とか、この世界自体とか、現状とかの選択肢の中から、現在の場所を選択する。いずれ全部聞くつもりなので適当に決めた。

俺の情報をどこまで公開すべきかは現状不明なので、できるだけ触れない方向でいく。

「ここは奴隷館・ロッキーでございますよ。私は^{わたくし}この支配人でボンド・ロッキーと申します。お名前を伺ってもよろしいでしょうか？」

まずは一安心といったところか。言葉は問題なく通じるようだ。

しかし、奴隷館ときたか・・・

まだ、この世界での奴隷の定義を知らないが、まあ似たりよったり

だろう。

名前か、前の世界との決別も含めて違う名前を名乗ろうとは思っているが・・・さて。

・・・・・・・・・・

「リオン。ただのリオンだ。」

アリオンの名前からとったのを使わせてもらうことにした。

「了解しました。リオン様ですね。・・・リオン様は自分がどうなっているかはお分かりですか？」

「いや、かなり長いこと眠っていた気がするが、自分の名前以外は分からないな。・・・奴隷館ということは俺は奴隷なのか？その女は俺を買いに来たのか？」

少し苦しいかもしれないが記憶喪失が一番都合がいいだろう。いきなり違う世界から来たとか言っても誰も信じないだろう。少なくとも俺は信じない。

「いや「リオン様は奴隷ではございませんよ。」

紅髪の女が何か言おうとしていたが、男ボンドが遮る。

「？じゃあ、なぜ俺はここにいる？」

「どこから話せばいいのか・・・リオン様は記憶を失っておられるようですので、最初から説明させていただきたいので、少しゆっくり

りお話ができる場所に参りましょうか。
イリア様、アイリス様もどうぞこちらへ。」

こいつあっさりと記憶喪失を信じたな・・・よほどのお人よしなのか、ただのバカか・・・・・・・・..
判断に困るな。

ボンドは言い終わると部屋を出て行こうとしたので、俺もついとりこうと立ち上がる。体は問題なく動くなと確認したところで、紅髪・確かイリアだったか？が俺を見ている。

「ん？何か顔についているか？」

「あ、いや。そうではないんだ。・・・その、私の名はイリアという。宜しく。」

「そうか。さっきも言ったがリオンだ。そっちは？」

「アイリスと申します。」

紅髪のイリアが、凜とした声で、ダークブルーの髪のアイリスが淡々としたこえで、それぞれ名乗る。

とりあえずは流れに身を任せるとしようか。

—— 奴隷館・ロッキー応接室 ——

階段を下り奴隷であろう者たちのいる場所を抜け、今は所謂応接室のような場所で、俺が座るソファアの前にボンド、右手側にあるソファアにイリア、その傍にアイリスといった配置だ。

意外だったのは奴隷たちの扱いがそれほど酷くなさそうだったということか。

やはり、俺の世界とこちらでは多少変わってるのかもしれない。

あと、目覚めた時から感じているのだが、^{ホム}頗る体の調子がいい。というよりも今まで感じなかった力があふれている感じだ。自称ではあったが神と融合した結果なのかもしれない。

「さて、リオン様ご自身のことですが、『アヘンダ（手帳）』見ていただければよろしいでしょう」

応接室に入り、中年の女性が紅茶——まんま紅茶だ、色、香りそのまま向こうのアルグレイといった感じ——を運び退出してからボンドが口火を切った。

「アヘンダ？」

「ふむ。そのこともお忘れですか。こうですよ『アヘンダ・オープン（手帳開示）』」

ボンドが右の手のひらを上に向けそう言うと、手帳のようなものが出てきた。

「！？」

「私の真似をしてみてください」

言われて同じように構える。

「『アヘンダ・オープン』」

もしかしたら出てこないのではないかと思ったが、すんなりと同じように同じような手帳が出てくる。

出てくるときにもなんら違和感を感じない。いったいどうなっているのだろうか？

「その中に名前・年齢・出身地などといったことから職業などの情報も一通りあるはずですのでご覧ください。個人情報面のもありますので基本的に他人には見せないほうがよろしいですよ。」

手帳・・・といっても数ページだけのモノでしかも、紙ではない何か金属のようなソレを早速開いてみる。

名前 リオン 年齢 16

出身地

職業：請負人

加護：なし

称号：受難、護る者、求める者

特性：緻密魔力操作、緻密闘気操作、見稽古、魔法隷属、止まらぬ進化、英雄体質、神眼

最初のページにはこう書かれていた。

何故か漢字で認識できるうえに、文字を確認した途端それについての情報も自然と浮かび上がってくる。

その情報によると称号や特性に記されているものは中々有用そうだ。

この世界に魔力及び魔法、さらには闘気及び戦技アーツというものがあることも認識できた。

称号の護る者としての多少皮肉に聞こるがな……

「……出身地に何も書いてないんだが？」

「はい？」

「え？」

⌈
•
•
•
⌋

上からボンド・イリア・アイリスの反応だ。

ボンドとイリアは疑問の声を上げ、アイリスは沈黙を保っているものの明らかに怪訝な顔をしている。

「何かおかしいのか？」

「いや、おかしいといえますか……ありえないといえますか。」

「
・
・
・
見てみるか？」

最初のページに見られて困りそうなものはないような気がするし、大丈夫だろうと判断したので、机の上に置く。

[[[.]]]

3人の長い沈黙が続く。

（地雷・・・踏んだか？）

「・・・すいません。出身地だけを見るつもりだったんですが、その他のも見てしまいました。」

ボンドの謝罪に続きこちらに謝るイリアと無言で頭を下げるアイリス。

「いや、別に構わないが・・・何かおかしいところがあったのか？」

俺の言葉にイリアがいち早く反応する。

「おかしいというよりも、非常識だな。緻密魔力・闘気操作は聞いたことはあるが、この2つを同時に持つてる者など聞いたことがないし、称号の《護る者》以外は全く知らないものばかりだ。一応推測できるものもあるとはいえ、これは・・・」

「・・・あんまり見せないほうがいいものか？」

「いや、リオンがどう生きるかによるんじゃないか？」

「・・・？」

「名声とかを求めるならかなり目立つものだし、逆に穏やかに過ごしていきたいなら、隠したほうがいいってことだよ。」

「あー、なるほど。理解した。」

名声とかは望んではいないが・・・前の世界でのこと、称号・受難、特性；英雄体質の情報からするとかなりの確率で穏やかな生活とやらを送るのは無理だろうな・・・

「楽しく生きる」・・・か。

俺にとっての「楽しい」ってのはなんなんだろうな・・・

記憶喪失とこれからの選択（後書き）

今までの四話と比べると格段に長くなりましたかね？

次回はまだまだある非常識な主人公の能力と異世界転生としてはデンプレ・お約束な感じの話になるんじゃないでしょうか？（何故、疑問形？）

そんな感じで進めていきたいと思いますー

面白いと思ってもらえたら幸いです（げざー

抱き枕と告白（前書き）

なんというんでしょうか？閑話のような雰囲気でしょうか。

まあ、作者としてはこーゆうほわーんって雰囲気なの好きなんですけどねー

日常編っていうんでしょうか・・・

そんな感じの話です。どーぞー

抱き枕と告白

結構な時間を費やしてこの世界についての話を聞いた。

途中、何回か客が来たらしくボンドはそのたびにでていった。

やはり生きていくには先立つものが要ということで、俺としては金を稼ぎたいという旨を伝えると、『ガーディアンズ護るべき者のために』というこの世界に存在しているらしいヒトにとっての脅威となる「魔物」に対抗する組織があるらしい。

なんでも実力があれば結構な額が稼げるそうだ。

当分の間の住処についても解決した。

イリアの家に厄介になるという形で。

『ガーディアンズ』での依頼は基本4〜最大6人までのパーティを組んで受けるのだそうだが、とりあえずは簡単な依頼を二人だけでやっていくつもりだったらしい。

そこに俺が現れたので是非手伝ってほしいとのこと。

・・・会ったばかりの奴の力量も見ずに決めないほうがいいんじゃないか、とか突っ込み所は多々あるのだが失うもののないこの身、イリアの好意に甘えることになるが、厄介になることにした。

——イリアの家——

そして現在、一日経った今日。

俺は俺に割り当てられた部屋のベッドで朝を迎えている。

イリアの家はでかい。

俺の感覚、つまり庶民の感覚でいうと、厨房がある家とか服だけを置いておく部屋があるとか言えばだいたいわかるだろう。そんな家だ。

昨日会ったときの恰好は軽鎧姿だったのでそこまで感じなかったが家と、家でのイリアのドレス―そこまで派手ではない―姿を見てこいつはどっかの貴族ではないかと思った。

昨日の話の中でこの世界の統治も簡単に把握している。

大雑把に言えば王族、貴族、平民の3つの階級？階層？に分かれている。

イリアの雰囲気というか佇まいというかその感じは平民とは感じられないというか一線を画す。

実際、平民だというシルヴィーやセララの挙動と比べるとより一層目立つ。

恐らく貴族階級、王族に準じたりするような人物なのではないのだろうか。

まあ、俺は権力とかに敬意を払う人種ではないので別段構わないのだが、そんな階級にいる（かもしれない）人が聞く限り最も危険な仕事をしているのだから、わけありなのだろう。

現実逃避終了。

さつきも述べたが俺は今自室のベッドで朝日を浴びている。
上体は起こしてはいない。起こせない。

なぜなら、俺は今、抱き枕にされているから・・・

・・・なぜだ？

スー・・・ハー・・・よし、落ち着いた。俺は冷静だ。
まずは整理しよう。

俺の体勢・窓の方向を向いている。つまり後ろから抱きかかえられているような感じだ。

そうだな、俺だって男だ。異性から好意を向けてくれるのは素直に嬉しい。

抱きしめられてドキドキしないのかと言われればそこまで人間やめてない。

だが・・・だが、だ・

俺の頭の真後ろにその女性的な部分があるのはどうかと。
頭一つ分高いのはなぜだと。

・・・言い方が回りくどいか。
俺にはコンプレックスがある。

それは身長だ。

俺の身長は160cm（切りあg

つまり俺より抱きかかえてるイリアのが身長が高く、足の位置は同じなのに前述のような状態になってるということが、多少、いやかなりむかつくのだ。

なぜイリアとわかるのか？

それは紅い髪が見えるからだ、それだけだ。

振りほどけば済む話なのだが、寝息だけで分かるほどぐっすりと眠ってるイリアに罪悪感が芽生えさらにダメ押しで10分程前、アイリスが来て「お嬢様がこのようにぐっすりと眠るのは久しぶりです。ですのでもう少しの間そのままいてくれませんか？」と言って去って行った。

形は疑問形だったのだがそれに逆らうことはできなかった。

――20分後――

ようやくイリアが目を覚ました。

「ふぁ・・・ああ。リオン起きてる？」

目を覚ましての第一声がこれだ。うん、何も問題はないな、イリアからすれば俺の顔は見えないんだししょうが・・・なくはないよな
！！！！

「・・・起きてるよ。とりあえず起きたんならな「おはよう」・・・
・・・おはよう。」

「…………イリア？とりあえず離してくれないか？」

「んー、もうちょっと、ね。」

なんかイリアの口調が変わってないか？

こつちが地なのか？

——さらに5分後、ようやくイリアが離してくれた。

「よし、まずはなぜ潜り込んだかを話せ。」

改めて俺の身長の高さを認識させたのだから、これぐらいの命令口調はオッケーだろう。

「うん。私がリオンを好きだからだ。」

「……………はい？」

「だから私がリオンを好きだから」

「…………いや、言ってることは分かりますよ？
ストレートすぎないか？」

「その、それは理由になってないんじゃないか？」

「そうか？昨日アイリスに相談したら、肉体と精神の両方から攻めていくのが効果的ですよって添い寝を勧められたんだけど？」

「…………アイリスが裏で動いたのか。」

さっき「そのままできてくれませんか？」は演技かあの野郎。

「私はこんな気持ちになったのは初めてなんだ。どうすれば上手うまくいくのかも知らない。だから私の思ってることをそのまま伝えてみた。今すぐに返事はいらないしリオンの足手まといにもなるつもりはない。今はただリオンの傍にいちやダメだろうか？」

・・・ハア。これも受難や英雄体質の効果なんだろうか？

さっそく厄介なことになりそうだ。

身分を隠蔽している（と思う）どこぞのお嬢様とか厄介ごとの予感しかない。

が、この世界での柵しがいのみなど何もないのだし、流れに身を任せるのがいいかもしれないな。

「・・・俺はいずれ世界を見て回るつもりだ。それでもいいっていうのなら、好きにすればいいさ。」

「それは大丈夫だ。私も色々と見てみたいし、どちらかというと、うん、都合はいいな。じゃあ、一緒にいてもいいんだな。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ん？」

「あ、ああ。そうだな、それなら一緒にくればいい。」

「・・・くそ、不覚にも嬉しそうに笑うイリアの顔に見惚れてしまった。」

ああ、また、守りたいモノができがった・・・

抱き枕と告白（後書き）

ぎりぎり間に合いましたね w

まったりと書きました面白いとおもってもらえればー

よろしくー（げざー

異世界の認識と異常な能力（前書き）

テンプレですチートですバグ野郎です、

そろそろ説明過多になっていきそうです・・・

そんな感じですがどーぞー

異世界の認識と異常な能力

昨日はボンドが何故俺を匿って？保護して？たのかは結局はつきりしなかった。

一通り話が終わった後に、イリアたちが買ったという給仕の奴隷のふたり、銀髪の子シルヴィーと茶髪の子セララと合流して色々と街を見回ってイリアの家に来た。

奴隷館・ロッキーに集められた奴隷たちは、ある程度日数が経つと必ず俺がいたあの部屋に連れてこられ、俺に触れていたらしい。なんでも外的接触は封印を解く最も初歩的なことだということできる限り多くの人に触らせようという目論見があったらしい。

で、俺のことも知っていたし起きたことにも驚いていた。挨拶の時に顔が赤くなっていたのは見なかったことにする。

色々と街を見回った―主に食料と俺、シルヴィー、セララの服、それから身の回りの細々した物の買い物―結果分かったことは食べ物や服に関してはあまり差異が見られないということ。

起きた時に来ていたのは上下とも黒一色の革のジャケットにズボンなのだが、見る限りジーパンも売っていたので、服飾関係も問題ないだろう。

・・・一般的な服を売っている店の隣にイリアが着ている様な軽鎧からフルプレートアーマーが売っている店があるというのは中々面白いものがあったとだけ。

電気とかは普及していないこの世界だが、その分見たことのない鉱石や「魔法」などのおかげで生活水準はそれほど酷くない。

元いた世界でいえばロンドンあたりにある古い街灯を思い浮かべてほしい。その中に『光集石』と呼ばれるものが入っており、朝から昼にかけて集めた光を周りが暗くなると放出するという性質をもつので、本街道では一定の明かりが保たれている。

流石に風呂は万人向けとはいかないようだが、初球の火魔法程度を扱えるのなら入れる。

「魔法」とかの存在だけでも異世界だなと認識できるが更に後押しするモノが存在する。ヒト類以外の存在。

最も大きな括りとして「ヒト族」の下に「ルイ」さらにもっと細かく「種」と分けられている。

俺もイリアたちの4人も「ヒト族ヒト類ヒト種」。

所謂向こうでの人間だ。

俺が街で見かけたのは金髪でパツと見では人間にしか見えないが特筆すべきはその耳。人間ではありえない長さを持つそのヒトは「ヒト族エルフ類エルフ種」。

他にも「ヒト族エルフ類ダークエルフ種」とかもいるらしい。

頭に獣の耳が生え左右に動く尻尾を除けば人間なヒトは「ヒト族獣人類ヒヨウ種」といい、「トラ種」や「猫種」、「犬種」などもない、最も多くの「種族」をもつヒト族らしい。

身長が20cmに届くかどうかのヒト族もいた。

これはイリアたちには見えなかったらしいが情報によると「ヒト族妖精類」らしく「種」までは特定できなかった。

生活環境に大きな差はないがこんなところで異世界にいるということを認識できた日だった。

——イリアの家・庭——

俺の「アヘンダ（手帳）」の1ページ目以降はこうなっている。

アーツ

アイテムボックス
空間作製、神癒、神帰り、スラッシュ斬撃、飛斬撃、ツワイスラッシュ双斬撃、ラッシュ連撃、双刃乱舞、
居合の極み

魔法

創造（想像）魔法

次ページ

高速移動の心得、高速戦闘の心得、立体機動の心得、太刀の心得、
二刀流の心得

で、次のページは白紙。

正直手帳というのも憚れる薄っぺらいものではあるがそこにあるア

ーッや心得、魔法は情報だけだよ強大なものだと思う。

イリアからの「告白」の後、シチューのような朝食を食べ現在、イリアの家の庭で俺は能力の確認をしようとしている。

アイテムボックス
まずは「間作製」これの情報では『異空間を作り出しアイテムを保存することができる。生きているものは不可。このアーツを持つものが持てないモノは不可。植物は可。死体であれば可。』というもので、さらに『使用数2』とあった。

アイテムボックスをしようと思うと同時に俺の前面180度ほどに黒い長方形が展開される。

縦横10cmほどの正方形が並び長方形を形成しているその左上端を見ると確かに何かが入ってるのが見える。

それを取り出そうと思うと何かが入っている2つの箱が眼の前にやってきそれ以外は消え去る。

手を伸ばしてとってみると向こうから手に吸い付くように出現する。

縦横10?の箱に収まるほど小さかったソレは手元にくると全体で1メートルはあるだろう野太刀だ。

手に取ると同時にその野太刀の情報が浮かんでくる。

『野太刀・天叢雲
アマノムラクモ

武器固有アーツ・捌切り

ランク・古代級
ルイナス

ふむ、日本神話の武器か。純粋な切れ味は勿論、武器固有アーツという「捌切り」も強力な代物だな。

居合の体勢から『闘気』をこめ発動させると本体の刃の他に7刃の刃が出現敵を斬殺するという技のようだ。

ランクについては昨日の情報収集のときに聞いている。

アスベラ粗雑級、ベネラル一般級、エスベシア特別級、デルホ希少級、ルイナス古代級と分けられており、デルホ級とルイナス級になると武器自体に『アーツ』や『特性』を持つようになる。

つまりこの『アマノムラクモ』はこの世界でも最上級に位置する武器というわけだ。

その鞘は黒。

引き抜いた刀身も黒く、反りのない造り。

刀身だけで俺の身長半分迫る長さだというのに、すんなりと鞘から抜くことができかつ手に馴染む。

とりあえずアイテムボックスに戻しもう片方のほうをとる。

今度のも太刀だが一般的な太刀と長さは同じくらいのモノ。

同じように情報が浮かんでくる。

『太刀・迦具土』カグツチ

武器特性：火結神
ルイナス
ランク：古代級』

今度は日本の神の名前か・・・

特性：火結神ホムスビノカミの情報によると、火に関することで右に出るものはいなくなるらしい。

鞘はこれまた黒。

引き抜くと刀身はなんというか冷えた溶岩？のような感じだ。

とりあえず武器がどんなものか確認はしたので次は自身の能力をしっかりと認識しておく。

武器の固有アーツ及び特性はここでは危なそうなので後回し。

まず、「称号」と「特性」に関して。

この二つは常時発動しているタイプのもので、意識してのON・OFFができない。

「心得」は特定の条件・場所・行動の応じて自動で発動するタイプのもの。

たとえば「高速移動の心得」はある程度以上の速度で移動した際、その速度に応じて思考速度もクロックアップされるという感じになる。

アーツは「闘気」を使って発動するもので、種類は大きく分けて3つある。

戦闘、回復、補助の3つに。

俺の「空間作製」は特殊。
アイテムボックス

「神癒」は回復。「神帰り」は補助。「スラッシュ斬撃」からは戦闘となっている。

スラッシュ斬撃で説明すると、普通に武器を振るう時とアーツ「スラッシュ斬撃」を使って武器を振るうのでは使う闘気の量にもよるが、数倍の威力を生み出す。

最後に魔法。

まずこの世界には「想像（創造）魔法」なんてものは存在しないといわれた。

この世界の魔法とは基本の「火」「水」「土」「風」の4属性があり。

それぞれ使う属性の魔法に対応する精霊に懇願し、自分にとって意味のある言葉（起動言語）とともに、使う魔法に設定されている呪文を詠唱、自分の魔力をもって精霊の力の一部を借りる。

といった非常にややこしいものらしい。

最も下級の呪文でさえ行使するのに大体5秒はかかるらしい。

そして、俺の魔法はというと「何か」が起こるという「結果」の「過程」を「創造（想像）」することで、行使できるといったものだ。

と、簡単にだが、俺の能力についての考察を終わる。

目の前には木がなぎ倒され、地面は捲れあがり、一部の壁が破損し、水たまりができていたりといった惨状が広がっている。

・・・多少やりすぎたかもしれないな。

幸い「神癒」は植物にも果ては無機物にも効くようで、木や壁じや治り、「想像（創造）魔法」で水は蒸発し、捲れあがった土は元通りになり、俺が能力の考察・試行する前の状態に戻すことはできた。

イリアたち4人はびっくりしていたり呆れていたりとしていたので、どうやら俺は非常識で異常な能力を持っているらしい。

異世界の認識と異常な能力（後書き）

結構うやむやにしていますけど大体字面で分かったりするんじゃないかなー

作者としてはこーゆー設定を考えるのって好きなんですよ。（ネーミングセンスについては突っ込まないでください

次くらいに、戦闘描写いれるかもしれませんねー

誤字とか脱字とかの報告・感想などお待ちしておりますよー）
げざー

「ガーディアンズとケンカ」(前書き)

というわけで1週間ぶりですね、よろしくお願いします。

はい、異世界といえは魔物的存在、それに対抗するギルド的組織、そしてどこにでもいるバカ。

今話はそんな感じのテーマです。

よろしくどーぞー

「ガーディアンズとケンカ」

——花の街・ヒンメル——

午前中―時計はないらしく太陽の位置からの推測―を今の俺の体で
できることできそうなことの確認に費やし、アイリス・シルヴィー
の合作料理を皆で堪能し、午後。

昨日の話にも上がったガーディアンズ護るべき者のためにという組織に登録するた
めにイリア・アイリス先導のもと、ここヒンメルの街にある『ガー
ディアンズ支部』に向かっている。

ちなみに『ガーディアンズ本部』は4大国、ヴァルト・ゲルヒム・
マヒア・シュヴァツハの首都にあるとの話を聞いた。

俺の服装は目覚めたときに着ていたものだが二人はそれぞれ装いが
変わっている。

イリアは家でのドレス姿ではなく胸元や腕の一部など最低限の急所
を守るだけの軽鎧姿。武器は剣。というか大剣。1メートルは優に
超えているそれは波打つ刀身が特徴のフランベルジュ。

軽鎧姿から片手で扱える種類の剣を使つてのスピードのある戦いを
するのだろうと思っていたら間違いだった。

というか、普通に動きが鈍るんじゃないのか？あれ。

アイリスはアイリスでエプロンドレスとは違ってローブを纏ってい
る。武器というよりも、アイリスは『職業：魔術師』で魔法使い系

の職業では一番下の『職業・魔法使いの卵』から数えて4番目の位だそうで持っているのは杖のようなモノ。

話に聞くとところによると一応、俺のような軽装の「守護者」ガーディアンもいるにはいるらしい。

よっぱどの貧乏人が敏捷さを信条とする者の両極端らしいが。

そうこうしているうちに目的の建物に到着。

外観は一言でいえば質実剛健が当てはまる。

使っている素材が何かかは分からないが白い木造の2階建て。

大きさはかなりのもので、開け放たれている正面の扉は10人ほどは一気に通れるほど広い。

その扉の上には『ガーディアンズ』の象徴たる盾を模したエンブレム。

デザインはシンプル。その名の通り護るというのにこれ以上の象徴はないだろう。

その建物に入っていく者、出ていく者の種類は多い。

性別、年齢、種族、纏っている魔力・闘気、装備品も見て感じるところではピンからキリまで。

この規模で支部だというならば本部はどれだけの喧騒に満ちているんだろうかと思いつつ、扉をくぐる。

——ガーディアンズ・ヒンメル支部——

中の喧騒は外とは比べ物にならなかった。

10人〴〵が集まっているところでは、涙を流し抱き合っているものたちを中心にしていたり、煤けた装備に身を包んだ者たちが陽気に笑っていたりとそんなグループが6、7組ほど。

6人程度のグループで落ち込んだ雰囲気の中、ちびちびと飲んでいる者たちや、なにやら紙を広げ話あっている者たち。

そんな中をイリアとアイリスの先導のもと歩いていく。

建物全体の3分の2ほどを進んだところで受け付けのようなところにでた。

それぞれの役割ごとに区切っているのか俺たちが向かっているのは
その中でも一番右端の緑の服を着ている人がいる区画で、といえはいいのかわからないがほかに赤、黄、青、白と緑を含めて主に5色の服を着た者たちが色々と動き回っているのが見える。

「こんにちは。とイリアさんじゃないですか。どうしたんですか？あ、そちらの方の登録でしょうか？」

緑色の服を着ているエルフの女が俺たち、イリアを確認すると声をかけてきた。

「こんにちは、ツイナさん。予想通りこっちのリオンの守護者の登ガーディアン

録を頼みにきた。」

「分かりましたー。えっと『能力査定』は受けますか？」

「そうだな。頼むよ。」

・・・イリアの口調が戻った？というか査定？

「お嬢様は信を置いたものには口調が柔らかくなりますので」

と、傍にいたアイリスが小声で補足してくる。

その性格はもとからなのだろうか安易に他人を信じて傷ついた経験からくるものは分らなかった。

「なるほど。・・・査定つてのはなんだ？」

「『能力査定』はその人の力を見るもので、これの結果で登録料免除やランクの飛び級その他の『ガーディアンズ』や国からの補助が約束される試験みたいなものですよ。」

聞こえていたのかエルフのツィナ？が説明してきた。

「挨拶が遅れてすまないな。俺はリオンだ。」

「おっと、私はツイエリーナ。ツィナって呼んでね。」

「その『査定』ってのがどんなのかは分かったが具体的に何をやればいいんだ？」

「模擬戦ですね。当支部に登録している中で、この期間なら査定官になってもいいと登録してくれている現役の「ガーディアン」の方と戦っていただきます。ちなみに皆さんシルバールンクかそれに準ずる実力をもった方たちです」

ランクについてよく分からないといった顔をしていたんだろう。ツイナは丁寧に説明をする。

まとめると『ランク』は下から赤、黄、青、白、銅、銀、金の7つに分けられているとの話だった。

ということは『能力査定』の相手は最低でもブロンズと戦えるのだろう。早くこの世界での実力が知りたい俺とすれば願っても見ない話だ。

「その査定はいつやるんだ？」

「はいはい。ちょっと待ってくださいねー……………えう！？」

机の下から書類を出して確認するツイナが変な声を上げる。

「どうした？」

そのツイナにイリアが尋ねると

「今、登録している『ガーディアン』さんなんですけど……………『騎士』ガーネットさんだけで……………」

「な！？ガーネット・デュサ・アンデルスだとー！！」

「はい。そのガーネットさんです」

なにやら盛り上がっている二人についていけない俺にまたもアイリスがフォローを入れてくれる。

「ガーネット・デュサ・アンデルスとは、一つの国に収まらず大陸全土を歩き回っている『ガーディアン』です。4代目『騎士』の二つ名を受け継ぎ、その実力はシルバーでありながらゴールドに届くものだそうです。」

「実際はゴールド相当なんですけど、そこまでいくと面倒くさい」と本人が言ってたのを聞いたことがありますよー」

「・・・『査定』は査定官によって判断基準は変わるのか？」

「あ、はい。そうですねー、ブロンズ相手に5分間の戦闘を耐え抜くことが基準です。シルバー相手ですと、1撃当てることが基準となります。実際は同じランクでも下位と上位ではかなりの差がありますのでー、悪魔でも基準となりますねー」

「『査定』はいつやるんだ？」

「そうですねー、ガーネットさんに連絡がつき次第となりますので早くて今日中、遅くても二日後には行えるはずですよー。・・・ですがホントにガーネットさんでよろしいんですかー？」

「うん、問題ない。というか俺の力がどこらへんかをしっかりと把握しておきたいしな。あと、早く自分の分は稼げるようになりたいってのもある。」

「ふふふ。なんだか訳ありってことですかー。いいですねー。リオンさん面白いです。できるだけ早くできるように頑張りますねー。」

「待てツイナさん。今のセリフは気に食わないな。」

「んん？やっぱイリアさんのお気に入りでですかー。いいですねー。ですけど、今の時世強い人には惹かれるってもんですし、女の数は男のステータスですしー、私にもチャンスはありますようー。」

「くっ……。」

「あー、とりあえず行くぞ。ツイナ宜しくな。ほらイリアも早く行こうじゃないか。」

正直色々と面倒だったので強引に話を打ち切らせてもらい、イリアの腕をつかみ入口のほうに向かう。

「わっっ！？わ、分かった、分かったから。自分で歩けるから離してくれー！」

言われたとおりに離すと小声で「そんなあっさりと……」とか聞こえてきた気もするが関係ない。

「結構無理やり話まとめたんだが、別に大丈夫だったよな？」

「はい。……まあ、査定官が『騎士』だということを除けばですが」

「……そーいや、イリアとアイリスはランクはなんだ？」

「私はブルーでアイリスがホワイトだな」

言いながらその通りの色の板を出してくる。

「ほう、これが『ガーディアンズカード守護者の証』か。」

「うん。ちなみに私たちも『能力査定』は受けている。結果は見ての通りだ。」

「ぎやははは、おい！！その姉ちゃん！！そんなガキと話してねえでこっち来てお酌してくんねえか！？」

話しながら歩いていた俺たち、いやイリアとアイリスに下卑た声が届く。

見ると4人ほどの体格のいい30代半ばといった感じの奴らが集まっている。

その中でも一際、大きい奴が声を発したみたいだ。

「あん？ガンたれてんじゃねえぞ餓鬼があ！！さっさと家に帰りなあ！！！」

「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

ガーディアンズ。名前は綺麗だというのにやはりどこにでもこういう輩はいるものなんだな・・・

「ぎひっ！！頭あ、こいつらびびってんぜっ！ぎひひっ！！！」

ビュッ！——バシッ！！パリン！！

男が投げてきたグラスを弾き落とす。

「・・・おい。今のはイリアを狙ったのか？」

「ああ！！そんなの関係ねーよっ！！誰だろうと俺の許可なく俺の前から消えようとするんじゃないやねえっ！！」

そうか、こいつは莫迦なんだな。

「・・・今まで意識的に抑えていた魔力・闘気を全開にし、かつ殺気をぶつける。」

「・・・覚悟しろ・・・ちっ！」

流石にこの衆人の中での殺しはダメだろうと、瀕死まで追い込もうと思ったのだが、叫び声をあげることなく絡んできた男、その取り巻き、さらには俺の前方の何人かが意識を失っていた。

「その程度で・・・もういいか。行こうイリア、アイリス。」

「あ、ああ。」

再び入口に向かって歩を進める。

と、

パチパチパチパチパチ——

俺たちの前にいる男が拍手をしていた。

「ガーディアンズとケンカ」(後書き)

うん、まあいいんじゃないでしょうか？

なにがとほ言いませんし言いたくないですけど)(。・・；

まあ、突っ込みや誤字脱字の指摘、そして質問とかあれば

作者は喜びますよ？

いえ、強制じゃないですよ？)(。・・；

ちょっと怖くて小説情報とか作者は見てませんしねw

早速1週間ちよい空白になってましたが7話目でしたー

面白いとか思ってもらえたりしたりしたら嬉しかったりしますw)
げざー

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9129x/>

英雄の条件（仮）

2011年11月17日21時48分発行